

分科会概要



10月6日(土)14:00~16:00 10月7日(日)9:30~12:00

分科会

1

ジオパークが担う普段の減災(防災)活動って何？

参加人数 70

会場 様似小学校体育館

キーワード 減災、防災、減災教育、教育旅行

企画運営 洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク

分科会

2

人の暮らしとジオを考える

参加人数 44

会場 様似町保健福祉センター

キーワード 人類の資源利用、黒曜石、価値の伝え方、ジオストーリー

企画運営 白滝ジオパーク、橋詰潤(新潟県立歴史博物館)、黒曜石ネットワーク

分科会

3

学びが生み出す地域の未来づくり

参加人数 61

会場 東様似生活館

キーワード 教育セッション

企画運営 三笠ジオパーク、教育WG

分科会

4

「備えあれば憂いなし!」ガイドツアーのリスクマネジメント～リスクを味方につけるガイドのコツ～

参加人数 58

会場 様似中学校体育館

キーワード ジオガイド、ジオツアー、安全管理、リスクマネジメント

企画運営 とかち鹿追ジオパーク、ガイドWG

分科会

5

無形文化財の伝承と活用をジオパークで考えるーアイヌ文化を例にー

参加人数 50

会場 様似町幼児センター

キーワード 無形文化財、アイヌ文化、伝承、活用、地名

企画運営 保全WG、アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク

分科会

6

自然災害とユニバーサルデザイン～すべての人が心地よく過ごせるジオパークを目指して～

参加人数 25

会場 様似小学校フリースペース

キーワード ジオパークにおけるユニバーサルデザイン

企画運営 ユニバーサルデザインWG

分科会

7

Discussion with Prof. Nickolas ZOUROS・坂下様似町長によるミニ巡検

参加人数 40

会場 様似中央公民館

キーワード ジオパークのマネジメント、ジオパークのリーダー

企画運営 目代邦康(日本ジオパークサービス株式会社)

分科会

8

SDGsから考えるジオパークと持続可能な社会

参加人数 48

会場 様似中学校視聴覚室

キーワード S D G s (持続可能な開発目標)

企画運営 環境省北海道環境パートナーシップオフィス、北海道地方 E S D 活動支援センター

ジオパークが担う普段の減災（防災）活動って何？

企画・運営

洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク

コーディネーター 加賀谷 にれ、横山 光（洞爺湖有珠山）／大野 希一（島原半島）

概要

JGNの防災ワーキンググループを中心に、災害発生時の被災地支援や“ぼうさいこくたい”への参加等、ジオパークのネットワークを活用した防災・減災に関する取組みが始まっている。その一方で、「なぜジオパークが減災（防災）を？」「減災は、行政の防災担当の役目では？」といった声がいまだに聞かれ、ジオパーク活動と減災への貢献に関する基本的な理解はまだ進んでいない。そこでこの分科会は、普段のジオパーク活動が結果的に減災に貢献することに対し、関係者が理解を深めることを目的に実施した。

内容

【10月6日（土） 14:00～17:00】

- ・趣旨説明 加賀谷 にれ（洞爺湖有珠山）、大野希一（島原半島）
- ・プレジオツァーの内容紹介およびアンケート結果の報告 中谷 麻美（洞爺湖有珠山）
- ・新燃岳噴火（2011、2017-2018）の対応と課題 坂之上 浩幸（霧島）
- ・岩手・宮城内陸地震（2008）の被害と減災教育 佐藤 秀和（栗駒山麓）
- ・熊本地震（2016）の被害とジオパーク運営への影響 石松 昭信（阿蘇）
- ・津波の減災教育と、海の楽しさ・豊かさを伝える活動 仲江 孝丸（南紀熊野）
- ・伊豆大島火山噴火（1986）土砂災害（2013）と減災活動 白井 里佳（伊豆大島）

【10月7日（日） 9:30～12:00】

- ・グループワーク①「ジオパークの行う普段の減災活動の事例と課題」
- ・グループワーク②「直面する課題に対し、どのような解決策があるか」

まとめ

災害別*に班分けし、以下の2テーマで議論・発表した。内容は以下のとおり。

(*災害別班分けは、「火山災害」「土砂災害」「津波」の3班。「地震」は少数のため津波に統合した)

【ジオパークの行う普段の減災活動の事例と課題について議論・発表：45分】

- ジオパークで行っている普段の減災活動
 - 火山班) 噴火の場面をイメージした対話による学習、火山灰を楽しむイベントを実施。
 - 土砂班) 学校の先生と連携した、集落の地形、地質、過去の水害遺構の学習を実施。
 - 津波班) 過去の津波浸入路を歩き、防災マップの改善を考えるイベントを開催。など
- 減災活動を進める上で直面している（または考えられる）課題
 - 火山班) メディア犠牲の問題。行政だけで進める弊害、災害は防災担当というタテ割り。
 - 土砂班) 地域による情報格差、障がい者、観光客にリスク情報が伝わらない。
 - 津波班) 有事のジオパークの役割が未設定、配布した副読本が使われない。など

【課題解決策についての議論・発表：45分】

上記波線部の課題に絞り、ジオパークの活動に関わる具体的な解決策を考えた。

① タテ割りの壁を、どう乗り越えるか？

- 地域防災計画は責任所在が不明瞭なものも多く、ジオパークを含め担当・役割を明記する。
- 散策路は管理者が別々で、関係者間の情報共有が大事。協議会が防災会議に参画（霧島）、環境省や気象庁職員が日頃の活動から地域と非常に緊密（伊豆大島）の好事例あり。など

② 観光客とリスク情報をどう共有するか？

- 情報の橋渡しを担う専門員がもっと減災を知る。下記に心がけ低リスクのツアーを実施。
【事前】ツアー概要や装備など事前の情報提供、催行上限を10名、現地集合・解散。
【当日】最悪の事態を考えた催行判断、対面確認、様々な媒体によるリスク情報の提供。
【普段】ガイド同士でリスク情報を共有、発災時を想定したガイドトレーニング。など

③ 製作した教材を、どうすれば活用されるか？

- 教材の企画の段階から、先生と一緒に利用シーンを考えて作れば、使われる。
- すでに作った教材については、先生と地道に接触して、使ってもらう。
- アップデートも大事。その年に起こった災害や被災体験、意見などを含める。
- 教材の学習に加え、昔からの（根拠のある）言い伝えなどを、ガイドが伝える。
- 過度に怖がらせるのではなく、恵みとのバランスが大切。

企画運営者の 総括・感想

自然災害には地域性があり、またそれに対峙する地域の課題も多様のため、分科会での議論をまとめた言葉はどうしても包括的な表現となり、具体性に欠ける。そこで今回は災害種別に班を分け、共通の課題の議論を通じて具体的な解決策を得ることを目指した。議論を深めていく中では、大会テーマに倣い、地域の将来を見据えた減災活動のあり方を重視した。

分科会では、2030年を目標年とするSDGs（持続可能な開発目標）についても触れた。なぜなら、地域で展開されている地道な減災活動が、世界が掲げる共通の目的達成に貢献できるということを参加者が認識する機会と考えたためである。自然災害が多発し、防災・減災に対する経験がある日本のジオパークは、ジオパークプログラムを活用し、減災活動のノウハウを世界に共有することが求められている。国内の個別事例の紹介にとどまらず、日本の多くのジオパークで実施されている質の高い減災教育が国際的に評価される将来を期待し、本分科会の総括としたい。

（加賀谷・横山・大野）



人の暮らしとジオを考える

企画・運営

企画 橋詰 潤（新潟県立歴史博物館）／黒曜石ネットワーク

コーディネーター 熊谷 誠、佐野 恭平（白滝ジオパーク）／橋詰 潤（新潟県立歴史博物館）

概要

世界ジオパークネットワークガイドラインでは、地形・地質学的に重要なサイトだけでなく、生態学的、考古学的、歴史的、文化的な価値のあるサイトも対象として取り上げる必要があることが明記されている。10年間の日本のジオパーク活動において、地形・地質サイトについてはその「価値」を伝える方法が研鑽され、成果が蓄積されてきたが、生態学的・考古学的サイトに関しては不十分といえる。また、ジオを背景にその地域に成立した人の歴史・文化との「つながり」を説明する際にも、社会科学的なアプローチが不足している感がある。本分科会では、白滝ジオパークのプレ巡検と連動し、黒曜石をテーマとしたフィールドワークと座学を実施し、考古学的アプローチから「人の暮らしとジオのつながり」を参加者とともに学んだ。さらに、ジオパークが扱う遺産の価値の伝え方について、5つの異なるシチュエーションから事例発表を行い、参加者と意見交換を行った。

内容

プレ巡検&分科会 開催日：10月3日(水)～4日(木) 参加者11名

人の暮らしとジオ資源のつながりを伝える活動として、白滝ジオパークの黒曜石を中心とした取り組みについて現地で学んだ。

分科会 1日目 開催日：10月6日(土) 14:00～16:00

14:00～14:10 趣旨説明

14:10～15:40 基調講演 木村英明（白滝ジオパーク交流センター名誉館長）
「黒曜石・ヒト・技術—人の文化を支えるジオ資源—」

15:50～16:00 質疑応答

分科会 2日目 開催日：10月7日(日) 9:30～12:00

9:30～ 9:50 グループワークの手順説明、班分け

9:50～11:50 ポスターセッション&ワールドカフェ

事例発表① 橋詰潤（新潟県立歴史博物館）

「歴史博物館で人と地球のつながりを伝える」

事例発表② 中村有吾（室戸ユネスコ世界ジオパーク）

「ジオ遺産をどう伝えるか？」

事例発表③ 佐野恭平（白滝ジオパーク）

「学校教育と連携したジオ資源の価値を伝えていく取り組み」

事例発表④ 野辺一寛（隠岐ユネスコ世界ジオパーク）

「ジオパークガイドとしての取り組み

～参加者に楽しんでもらうための工夫～」

事例発表⑤ 熊谷誠（白滝ジオパーク）

「国指定名勝を舞台とした謎解きゲームの取り組み」

※参加者を10名前後の5つの班で分け、20分（事例発表10分、意見交換10分）で次の事例発表のテーブルへ移動することとした。

※2回したところでコーヒープレイク（30分）を挟み、参加者間の交流を促した。

11:50～12:00 質疑応答・まとめ

まとめ

人の暮らしとジオのつながりを知り、その価値をどのように伝えていくかについて、人類による資源利用の原点ともいえる黒曜石を題材としたプレ巡検と講演によって取り組み例を学んだ。講演後の質疑応答も活発で、本テーマへの興味関心が高いことが窺えた。事例発表については、「博物館」、「現地」、「教育現場」、「ガイドツアー」、「ガイドのいない観光イベント」という5つの異なるシチュエーションで行い、参加者がそれぞれの立場、場面で何が出来るか発表者と意見交換を行うことで、価値を伝えていくためのより良い方法について模索してもらった。ワールドカフェ方式を取り入れ、参加者が発表者の各テーブルを巡回したことにより、発表者と参加者だけでなく参加者同士でも意見交換が行われ、多くの事例を共有することができた。全体的には活動に際しての悩みが多く、先発地域の取り組みが後発地域に共有されていない状況が見えた。社会科学をベースに人の暮らしとジオのつながりを伝える活動を一般社会に広めていくために、様々な地域の人がいつでも引き出し、実践し、フィードバックができる仕組みや体制の整備が必要であることを参加者全員で確認した。

企画運営者の 総括・感想

今大会のテーマの1つである「弱い紐帯」の強みを生かすことを意識し、事例発表者と参加者、参加者同士が活発な意見交換をできるよう、ポスターセッションにワールドカフェ方式のグループワークを取り込み実施した。これまでの事例発表の場は時間的な制限もあり、発表者と参加者の双方向のコミュニケーションが難しく、興味関心の高い一部の参加者とのやり取りに終始してしまうことがあった。本方式により、参加者にとって価値の高い情報を入手、交換することができたと思う。また本分科会は、新規認定地域や認定を目指す地域、全国大会や分科会への参加経験が少ない参加者が多かった。保全や教育、ツーリズムなど、これまでの活動を蓄積し、より専門性を高めていく作業が求められていく一方で、本分科会のような情報交換の場、弱い紐帯を強めていく場があらためて必要であると感じた。

(熊谷、佐野)



木村英明氏による基調講演



基調講演での質疑応答



ポスターセッション&ワールドカフェ



ワールドカフェでの参加者同士の交流

学びが生み出す地域の未来づくり

企画・運営

コーディネーター 下村圭（三笠ジオパーク）

ファシリテーター 松田剛史（NPO「ソーシャルアドベンチャーあんじょう家本舗」）

協力 教育ワーキンググループ

※文部科学省「ジオパークを活用したESD-SDGs学校教育推進モデル・教育旅行推進モデル開発事業」の一環で開催

概要

ESD（持続可能な開発のための教育）やコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）など、地域で実施されている様々な教育活動について、学び・再認識・振り返りを行い、学びが生み出す地域の未来づくりを考えるきっかけとして、「ジオパークは地域（社会）にどのように貢献できるのか」「ジオパークにおける未来づくりとは」「持続可能な社会づくり・人づくりとは」などについて、講演やワークショップなどを通じ、参加者同士が意見交換等を行い、各地域へ持ち帰り実践を行うための場づくりとして実施した。

内容

10月6日

14:00 開会・趣旨説明 → 14:05 プレジオツァー報告・総括 → 14:15 講演①

→ 14:55 コーヒーブレイク → 15:05 講演② → 15:35 意見交換 → 初日終了

講演①「教育活動における『ESD×SDGs×ジオパーク』の取り組みから地域の持続可能性について考える」 柴尾 智子（ESD活動支援センター）

講演②「地域におけるコミュニティスクールとジオパークの関わりについて」

永堀 善之（北海道教育庁胆振教育局）

10月7日

9:30 開会・振り返り → 9:45 ワールドカフェ（途中コーヒーブレイク）

→ 11:45 総括・全体振り返り・まとめと共有・大会宣言内容の確認

ワールドカフェROUND質問

① ジオパーク活動における「教育」とはなんだろうか？

② ジオパーク活動における「教育」とはなんだろうか？必要なことってなんだろうか？

③ ジオパーク活動において「教育」をどのように進めるとよいか？

プレジオツァーと連動した取り組みとして、ジオパークにおける「教育」には様々な切り口があることを多様な参加者との対話や意見交換を通じて気づき、ジオパーク活動における「教育」について広い視野から考え、行動に結び付けることができるようになることを目的に、初日は「世界の潮流とジオパークの「教育」の関わりについて知る」、2日目は「ジオパークにおける「教育」のあり方や、進め方について考える」をテーマに実施した。

まとめ

講演①では「ESD」や「SDGs」について講演と通じて改めて知識を深めた。教育はすべてのSDGs達成のために必要であり、ESDは持続可能な開発の担い手づくりのための教育・学びである。ジオパークの活動は地域の持続可能な開発のための活動であることから、すべからくESDの実践であり、SDGsに貢献しているということを共有した。

講演②では「コミュニティ・スクール」について制度や内容について知識を深め、学校教育や社会教育についてジオパークとの関わりや可能性について事例等を通じて学習した。

「教育」は多様で多彩な取り組みであり地域によって特色がある。また学校教育や社会教育など、それぞれの立場によって地域における様々な教育活動を実践していることを知ることができた。

上記に加え、意見交換を中心としたワークショップを行うことで、多様な利害関係者における情報・事例共有や意見交換を行うことで、ネットワーク活動を通じた深い学びへと結びつけることができたと考える。

企画運営者の 総括・感想

プレエクスカーションと連動した取り組みを行い、全体の流れとストーリーをしっかりと構築することで、各地域の多様な活動について深く知り、意識的に意見交換を行う「機と場」を設けることで、ジオパーク活動における「教育」について広い視野から考えることができたのではないかと考える。

今回の経験や交流を活かし、各地域で行動へと結びつけ、新たな教育活動へと繋がっていくことを期待するとともに、次回の全国大会においてもプレジオツアーとの連動した取り組みの継続実施を希望する。

(下村)



柴尾次長による講演



ワールドカフェテーマ説明



意見交換の様子



大会宣言内容の確認

「備えあれば憂いなし!？」ガイドツアーのリスクマネジメント ～リスクを味方につけるガイドのコツ～

企画・運営 ガイドワーキンググループ とかち鹿追ジオパーク

阿久澤小夜里（とかち鹿追ジオパーク）、松本宏樹（とかち鹿追ジオパーク）、
大西潤（とかち鹿追ジオパーク）、高田正澄（筑波山地域ジオパーク）、
山崎真流子（阿蘇ユネスコ世界ジオパーク）

概要

当分科会では、ガイドツアー中の安全管理について、全国の活動や経験を共有し、今後の事故防止に繋げることを目的に開催した。開催にあたり、全国で活動するガイド・事務局に事故・ヒヤリハットについてのアンケート調査を行い、その結果を共有した。

内容

分科会は、参加者それぞれの経験や立場の違いによる視点の相違等を理解・共有するため、行政職員・ガイド混合の6人1グループで行った。参加者は、ガイドという業種もあってか、和気あいあいと積極的に意見を交わしていた。

1日目（10月6日）

14:00－14:15 主旨説明・参加者間自己紹介

14:15－14:25 プレツアー実施結果紹介

14:25－14:55 講義「安全管理とは」

15:05－16:00 ケーススタディ

プレツアーでの様子を画像で紹介し、場面場面でどのような危険が潜んでいたかを考え、ガイドの立ち位置、気を配るポイントなどを共有した。

2日目（10月7日）

9:30－9:40 事故・ヒヤリハット事例集の紹介

9:40－10:00 ガイドツアーに関する保険紹介（東海日動パートナーズ北海道・川人）

10:10－11:45 グループワーク「安全管理の視点で仮想ツアーを構築してみよう」

11:45－12:00 まとめ

グループワークでは、お題として出されたツアーに対し、催行前と催行時においてどのような準備と配慮が必要かをグループ毎に検討・共有した。また、急遽発生したアクシデントについてどのように対応するか検討した。

まとめ

ジオツアーでは、天候や訪問先の整備状況の他、参加者の個々の状況（体調や年齢等）を考慮し、安全なサービスを提供しなくてはならない。安全確保は、ガイド個人の技術力・知識量等に依るところも大きく、全てのガイドが、この状況・この環境下であれば何人の安全を確保できる。といった安全のラインを安易に定めることは危険である。今回の分科会を通じ、ジオパークのネットワークを活用し、全国の経験を共有することで、「こんな事故が起きるなんて思ってもみなかった」といった想定外を減らし、適切な判断を下すためのスキルアップを図ることができた。

最後に、ガイドにとって、お客様の安全確保は前提条件である。しかし、「安全第一、何事（アクシデント）も起こさないツアー」の提供を目指すのではなく、「楽しんでいただくための安全確保」という視点を忘れずに今後も互いに切磋琢磨していこうということを共有した。

企画運営者の 総括・感想

今回は、プレッシャーと分科会をセットで行う長丁場の企画であったが、その長丁場を逆にとり？コーディネーターの5名は、開催期間中も参加者の顔や反応を見ながら、「明日の内容はこうしよう。ここにもうちょっと時間を割きたい」といった議論を繰り返して内容をブラッシュアップしていった。その成果もあり、分科会終了後のアンケートでは、多くの方から楽しみながら学びを深めることができた。という感想をいただいた。現場での状況の共有、そして室内での協議という流れは、ジオパークの様々を議論する上で非常に有用な方法であることを再確認した。

(大西)

